

# 槐 かい

岡井省二創刊

平成31年3月号

平成三十一年三月一日発行 第二十九卷第三号 通巻第三三三号 (毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



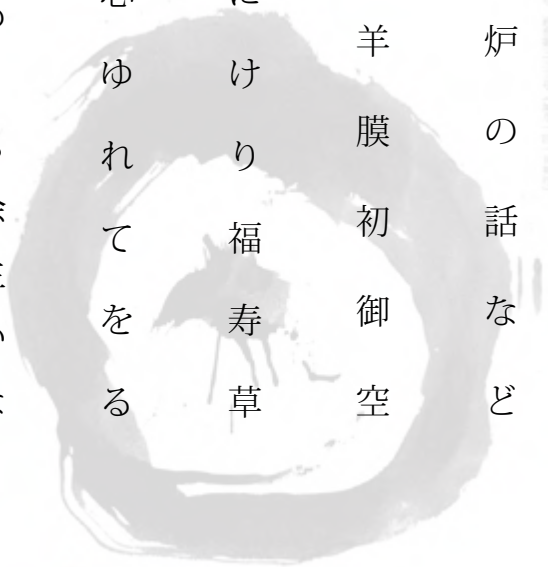
# 今年の福

高橋将夫

初富士の裾をめぐつてみたきかな  
火の鳥が舞ひ降りさうな初茜  
情念を閉じ込めて滝氷るなり  
指先に集まる力弓始

『俳句界』1月号より8句

呵々大笑今年の運を呼び込みぬ  
どんぶらこ今年の福が流れ来る  
初竈終へて廃炉の話など  
この星を包む羊膜初御空  
幸せが色に出にけり福寿草  
初風に達磨の心ゆれてをる  
若菜野に来てときめくも余生かな



# 槐安集

水野恒彦

狐火のときどき見ゆる鏡の間  
大白鳥岡井省二のひとり寝し  
晩節も尽きぬ夢あり冬銀河  
青空はありてなきもの崖氷柱  
白い音せる枯野のごとく愛せるか

加藤みき

あらたまの年の広場の子らのこゑ  
あちこちに鉢を置きて冬籠  
消してなほ眼裏にある冬灯  
流れ星われも宇宙の一つにて  
春天に待ち人ありて行きにけり

中島陽華



梁うづほりに眸のある良夜かな  
和菓子屋のほほえみ釣瓶落しかな  
芋の露赤間硯の肌の上  
雀は蛤に大蛇は縄となる  
後ろ手に風の香を聴く神樂月

竹内悦子

猪食ふやキュツと鳴りたる腹の虫  
メビウスの帯十一月の夫婦の日  
新宿る招おが霊たましぐれ来てをりぬ  
男山信長塀と山茶花と  
年の瀬の音動き出す日曜日

雨村敏子

ももいろの風船空へ高く高く  
カトレアに囲まれてゐる顔施かな  
九泉も美しからむ牡丹焚く  
丹頂の空あかあかと鎮もれる  
香具山にもつとも近き春の星

本多俊子

こがらしに竹鳴るやうな音しきり  
桃色の骨をすかして磯千鳥  
心音のことにひびく夜シクラメン  
侘助の一念通す白さかな  
天狼へ何かを折り夜を眠る

近藤喜子

風冴ゆる荒波まるで海の牙  
ずつしりと身に重力や風邪心地  
空白の中にすくと日向ぼこ  
聖夜なり子の見る夢の色は何  
色白にならん寒月光まとふ

瀬川公馨

年の火を絶やさぬ老の二人かな  
目蓋の縮んでゐたり冬の鳥舎  
無言歌を同行にして冬の旅  
茶の花の無限地獄を覗きたる  
一絞りなほ一絞り冬紅葉

柳川 晋

年歩む子供のやうに見え隠れ  
聖夜なり悪魔が天使になりたがる  
息絶える銀河帝国千葉笑  
棒の如きものを輪切りに大根焚  
鬼火にもネオンの灯にも招かるる

熊川 暁子

手のひらに初雪受けて火傷せり  
枯れ山に水差すごとく流星雨  
噴水に日の当りたる寒さかな  
冬の木にならぬ口実さがしをり  
義士の日の防犯カメラの位置にをり

寺田すず江

冬の虹塞翁が馬連れてくる  
素そつ気けなく行く人々や北塞ぐ  
不器用に生きてゆくなり葉喰  
万物の輪りん廻ねて転ん生しょう雪 螢  
霜晴れや欲得もなく生きんとす

岩下 芳子

平成の扉開け閉め去年今年  
方丈を開け放ちたる紅葉の賀  
綿虫の胸に飛び込む熱血漢  
八衢やちのまた一つを行けば冬の森  
冬將軍砂の砦を攻め落す

有松洋子

絶え間なく雲去来せり年の暮  
裸木の耐へて己を支へをり  
フラメンコダンサー出番待つ焚火  
朝靄に濡れし落葉の匂ひ立つ  
ぎざぎざの葉で良し太れ大根よ

岩月優美子

底冷えや潤滑油差したき五体  
山頂の樹氷は鳥の翔ぶやうな  
児の夢の中にサンタは生きてゐる  
涙腺の熱くなりたる冬銀河  
大志抱く冬芽と思ふいとしけれ

近藤紀子

無花果を煮つめる音や一葉忌  
冬草のやはらかき青撫でてゐる  
なんとまあ狸が犬科だったとは  
白鳳の廃寺の角に冬たんぽぽ  
手袋に傷を隠して会ひに行く

竹中一花

山番や白狐赤狐の火を点す  
河童らと熱爛一本もう一本  
蔵町の煙突冬を吐いてをり  
筒井筒紅葉の庭の水を聞く  
ビルの窓師走を閉めてしまひけり

前田美恵子

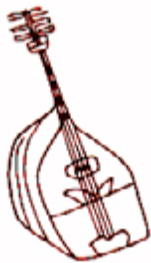
結界を越ゆ木枯の行場無し  
酒蔵の底冷えとなる犬矢来  
新酒積む蔵の河童に見送られ  
夜のレースサドルのゆるぶ四温かな  
寒椿を渾身に聞く淡海かな

中田禎子

天国へ心の賀状書きにけり  
断捨離の枯野ふかふかしてゐたり  
冬桜白洲正子のかくれ里  
発酵のこゑふつつと冬の晴  
マッチの火クリスマスイヴはじまりぬ

吉田順子

霜柱踏めば昔の響きけり  
身の枯るる寂しさにゐて命炎ゆ  
山国に星のあつまる寒の入  
寒木瓜や身のうち急ぐこと多し  
蟹漁に怒涛あげたる寒の星





# 槐市集

竹村 淳

天を染め地を染め果つる銀杏かな  
もみじ踏む比叡の僧の素足かな  
これがこの寂びる古里一茶の忌  
ランドセル日は早や西に芒道  
精神の風景喻へば秋の風

田中 信行

さざんかやバブルの頃の懐しき  
冴え返る古希を迎へし名投手  
ストーブに先ず猫あたる我が家かな  
年の瀬や讚美歌漏れる塀の中  
万博の年は古希なり去年今年

田中美恵子

枯蓮や鐘撞堂に夜の明ける  
濠川の十石舟や冬に入る  
珈琲の匂うや山の水冴ゆる  
薦被の河童跳りし小春かな  
神宿る山の恵みや木頭柚子

時 澤 藍

十本の懸け大根のそぞろ寒  
初霰土鈴の珠のころんころん  
平成の終はりの気炎忘年会  
枯れ菊の炎励ます通り風  
新前のパパの抱っこや実南天



中 貞 子

元号の有終の美や注連飾る  
登校の子供送りし焚火あと  
セーターの時々違ふ縄模様  
寒卵この温もりを妊婦へと  
霜柱つぎつぎ踏むや幼なの日

中 島 昌 子

怒り肩いよよとんがる寒さかな  
着膨れて溜め込んでる静電気  
ふくよかな河童のぬしき今年酒  
人参を引きたる土の黒さかな  
生れたての星の瞬く冬銀河

中 谷 富 子

みのこづち行先知れぬ旅となり  
横顔を見せて墓石の寒鴉  
むかご飯おかめひよとこ親ゆづり  
直角に生垣刈られ師走なり  
紅葉掃くついて離れぬ恋心

中 西 厚 子

冬の暮砂丘に足跡残しをり  
談合浜風を終へし空には三日月や  
高速のオレンジ灯に冬集ふ  
初雪の便り聞かれず靴磨く  
髪乱し師走の夜を駆け抜ける

橋 本 順 子

杉の秀の眩しくあるや時雨過ぐ  
ヒマラヤの岩塩含み新走り  
明星や紙漉く村に灯のともる  
マフラーを自在に巻きて一人旅  
氏神を清め歳暮の顔となる

平 野 多 聞

積む記憶失ふ記憶露の玉  
ちやんちゃんこ我利々々亡者に袖取られ  
暴動に凱旋門の鐘氷る  
さくさくと燃える恋あり霜柱  
吊るされて父の大きき知るコート

# 槐集

## 高橋将夫選

牡丹鍋囲み大人の話とか  
竹原 久保 夢女

裏表なき心根よ石露の花

大いなるものの系譜に海鼠かな

茶の花や金の小仏抱きををる

一年に一度裸になれる木木

少女いま恋のときめき息白し  
守口 三木 亨

晴ればれと海鼠が遊ぶ禁漁区

すきま風風見鶏には知らぬこと

生も死も風が決めごと冬日影

行く年の一夜の夢かシラーの詩

スタジオは夢を叶える七五三  
大阪 江島 照美

小春日や縁切り寺の列長し

波乱にも大火にならぬ火宅かな

無口なる霊のをる山眠るごと

極月や死は日常と思はるる

風花や妖精からのラブレター  
大阪 藤田美耶子

会へずとも以心伝心月の友

畳替へ心の襟を正しをり

記念樹は司令塔なり寒鴉

煩惱に身をこがしたる雪女

赤人の富士の白雲浮いて見よ  
平野 多聞

大年や我に未完の貌一つ

大噓はばかりのなき我が家かな

大仏の背伸びの見たき小春かな

セーターのコバルトブルー胸高し

八百万の神に守られ新暦  
枚方 中 貞子

良き家族よき友がゐて煮凝りぬ

脈拍の正しき音や葱刻む

焚火の香好きよと婆のまた来たる

風神の爪痕深く凍てにける

# 銀河往來

## ◆槐集観照

一年に一度裸になれる木木

久保 夢女

裸木を見てこういう愉快な発想をする作者は彼女をおいて他にないだろう。裸を肯定しているところが愉快。

〈大いなるものの系譜に海鼠かな〉の句、あの海鼠が偉大なものの系譜という発想はどこから出てくるのか。思わず真剣に考え込んでしまいそう。

〈牡丹鯛囲み大人の話とか〉の句、さてどんな大人の話が興味しんしん。

〈茶の花や金の小仏抱きをる〉の句、なるほど茶の花の蕊が金の小仏に見えてきた。

千葉突すきま風風見鶏には知らぬこと

三木 亨

どうやら、すきま風は風見鶏の感知するところではないようだ。風見鶏の本質を捉えている。

〈晴ればれと海鼠が遊ぶ禁漁区の句は禁漁区の子鼠の気持をしかと捉えている。

〈少女いま恋のときめき息白し〉の句、少女の恋と白息の取合せが実にフレッシュ。

極月や死は日常と思はるる

江島 照美

日本は平和で安全な国。しかし、ふと悲惨な事件を耳にした時、身近な人の死に会った時、死は決して遠くにはなく日常

の中にあるのだと思ひ知らされる。

〈小春日や縁切り寺の列長し〉の句、これも時勢か。

〈波乱にも大火にならぬ火宅かな〉の句、波乱があっても大火にならぬなら火宅といえないかもしれないけれど、そこは言葉の綾。

〈スタジオは夢を叶へる七五三〉の句、たしかに七五三を撮るスタジオは夢があふれている。

畳替へ心の襟を正しをり

藤田美耶子

この作者ならではの、襟を正した精神の風景。

〈記念樹は司令塔なり寒鴉〉は記念樹に寒鴉が止まっているだけの景だが、きつと寒鴉の姿がまるで司令官のようにさまになっていたのだろう。

〈風花や妖精からのラブレター〉と〈煩惱に身をこがしたる雪女〉の句は作者の精神の若さのバロメーター。

大年や我に未完の貌一つ

平野 多聞

まだまだ未熟だと鏡を見ている姿が想像されて愉快。

〈赤人の富士の白雪浮いて見よ〉の句、山部赤人の富士の雪が鮮やかに目に浮かぶ。

焚火の香好きよと婆のまた来たる

中 貞子

今となつては懐かしい焚火の景。「焚火の香」と「また来た」の措辞が共感を呼ぶ。

〈八百万の神に守られ新暦〉の句もことにめでたい。

〈以下略〉